

迫るみぞうの高齡化社会

団塊の世代中心に課題解決を

私の発言



なべ 康利
ま 真鍋

団塊の世代という、いつの時代にもキーワードになってきた「塊」が高齡になるとき、みぞうの高齡時代がやってくる。それはもう目前に迫っている。欧州の高齡先進国はゆっくりと高齡化率が上がってきたので、国ぐるみでいろいろな取り組みがなされ、成熟してきたが、わが国の少子・高齡化対策は、場当たりの対応に終始し、あまり長期的だったとはいえない。その結果、街そのものが子供を育て、高齡者を守るといふ機能をなくした。人の関係も希薄になり、未成熟のまま、気付けば世界に名だたる高齡社会になってしまったというのが現実である。

昨年ようやく介護保険という新しい仕組みが施行されたが、生まれたばかりでまだ一人前ではなく、問題が山ほどある。これらの問題に不平、不満を言うだけではなく、その解決に高齡者や次世代の英知を結集し、少しでも良いものに育てていかねばならない。当事者の高齡者はもちろん、予備軍たる団塊の世代が、どう考えるかが大きな課題である。

決して人ごとではない。保険料は徴収され、年金もこの先どうなるか全く不明。景気は最悪でリストラと称した体の良い首切りで職を失い、定年まで勤めても最後にはあっけなく放り出されてしまう。特に男性の場合、大きな船—いわゆる会社、肩書—からいや応なく降りざるをえなくなったとたん、目標を失い、行き場をなくす、という話も多く聞くので、今のうちから準備が必要だろう。高齡社会を自分のこととしてとらえることが不可欠だ。

私は高齡者とその家族向けに宅配の地域生活情報誌「悠悠と」(隔月刊)を一九九九年十二月から発行している。読者から問い合わせや要望が寄せられ、それらをもとに、読者の視点で調べ、情報提供することが狙いである。最近目立ったのは、「話題になっていく共同住宅はどんな仕組みなのか」「散歩に適したお勤めの公園を紹介して」などの声だった。

はんなりする情報の中から必要なものだけを見つけるのは至難の業だが、重要な情報の入手が次のステップ、豊かな暮らしを実現する。それには、自分たちがどう生きたいのか、という思いを明確にし、それぞれの声を上げねばならない。中でも団塊の世代が、年長者にとって「昔とったきねづか」である知恵と経験を受け継ぎ、良い形で次世代に伝えるため、人を育て、そして街を再生することが急務である。

(地域生活情報誌「悠悠と」編集長 札幌市)